

弘前事件の再検討

河西英通

一 弘前事件とは何か

青森県の自由民権運動は菊池九郎・本多庸一らが一八八〇年（明治三年）結成した共同会を中心に展開した。共同会は弘前の東奥義塾を基盤としていたので別名東奥義塾党とも呼ばれる。一方、反民権派は県会議長大道寺繁樹や中津軽郡長笹森儀助ら保守派上層士族をはじめ、廃藩置県以降、津軽家の家政改革を要求し、同家の義塾援助を非難していた旧勤王派の不平等士族たちであった。

対立する両派を調停合同させようとした県令山田秀典（一八七六年八月から八二年一月まで在任）は、一八八一年一〇月二八日、書記官郷田兼徳宅に菊池・本多・大道寺・笹森ほか、西津軽郡長蒲田昌清・東津軽郡長館山漸之進・北津軽郡長工藤行幹・南津軽郡長一町田大江、県会議員赤石行三、県庁属官菊池元衛・同伊東珍英、共同会員石岡周右衛門を集め、一致団結を要請した。

これに対し、笹森・大道寺は共同会員の館山を東津軽郡長に任命した山田の民権派寄りの姿勢を批判して、相次いで職を辞した。山田は笹森の後任に館山を、館山の後任に菊池を任命したが、翌八二年一月六日地

方官会議のため滞京中急死する。反民権派の郷田書記官が県令に就くことで、館山・菊池は辞任に迫られ、共同会は野に下がる。さらに、津軽家から東奥義塾への資金援助も問題となり、同年暮、津軽家令西館孤清の辞職、年額三千円の助成金廃止とそれにかわる一時金一万円の下付、塾長本多の退任となり、ここに共同会は衰退していった。

以上がいわゆる弘前事件（あるいは弘前紛糾事件、弘前紛糾事件）のあらましである。明治一〇年代の青森県政界を論じる時に欠かせないこの事件について、早くは橋本正信「青森県の自由民権運動——弘前地方を中心に——」（『国史研究』第三三号、一九六三年）が「保守派勢力の強い土地において官民調和的民権運動も、単なる士族争いに終始し、共同会の母体たる東奥義塾と旧藩主との封建的つながりを克服出来ない弱さを露呈」したと評価しているほか、新谷恭明「東奥義塾の研究」（『日本の教育史学』第二一集、一九七八年）も「旧藩士族内の実権争いのミクロな抗争」ととらえている。

こうした事件を局地的な士族間抗争と位置づける研究に対して、事件の背景として支配権力の動きを重視する研究がある。不平等士族の動向に注目した松尾正人「明治前期における弘前藩士族の動向——山田登と

その一派を中心として——」（『近代日本形成過程の研究』雄山閣、一九七八年）は旧勤王派の山田登とその一派が「県下での民権運動の進展を拒む反民権派の先頭を形成し、いわば新政府による民権派抑圧の一端を担った」とのべ、青森県における当該時期・事件に関する史料の貧困状態の改善をめざして、事件の根本史料を発見・紹介した沼田哲「本多庸一答申書」（『青山史学』第八号、一九八四年）も反民権保守派の中央高官に対する働きかけに注目している。

青森県版明治一四年の政変ともいべき弘前事件は、本多庸一答申書が「初メハ大導寺・笹森等ト県令トニ関シタル者ノ如ク、中間ニ至リ、旧郡役所出仕ノ諸子ト、共同会中五六ノ諸子ニ関スルガ如ク、追々変遷シテ、終ニ県令ト書記官トノ間ニ存スルモノ、如クナレリ。怪シムベキノ至ナリ。」と語るようにその実態は複雑である。関係史料の発掘を進めつつ、さまざまな角度から検討される必要がある。

また、青森県における自由民権運動がこれまで言われてきたほどには△低調▽ではなく、請願運動・選挙闘争などでは全国的にも有数の先進県であったことを考慮するならば（拙稿「青森県の大同団結運動」『国史研究』第八〇号、一九八六年）、弘前事件の民権派弾圧の側面は従来にもまして重いものとなる。

本稿は以上のような研究史と問題意識をふまつつ、事件に関するいくつかの新史料を紹介・検討することで、事件の再構成・再検討を試みようとするものである。

二 事件の発端

まず、事件の発端となった一八八一年一〇月二八日について検討してみよう。全国的にはいわゆる明治一四年政変の直後であり、翌二九日は東京で自由党が結成されるという民権運動のハイライトの中、県内では一月二日からの臨時県会の開会を直前にして事件は始まっている。

本多答申書によれば、館山の東津軽郡長任命の前日（十月下旬）、本多と館山は青森で山田県令から、「地方ノ衰頹ヲ挽回シテ、将来ノ進歩ヲ図ルハ、衆力ヲ集メ、衆智ヲ合スルノ外良策ナシ。……」[国会開設の詔勅が出された今や——河西注、以下同じ]政治ノ方向既ニ定ル、天下ミナ一ナルベシ。何ンゾ朝野ノ別アラン。諸子ハ嘗テ翕合団結ヲ希望スル者ナリ。」と地方有志者の合同団結の必要を説かれ、「余今朝書記官ト共ニ、此意ヲ大導寺ニ語ル。大導寺モ亦之ヲ賛ス。諸子宜シク就テ謀ルベシ。」と言われた。これには本多も驚き、翌日、大道寺に会って県令が本気であることを確認したのち、この要請を受けた。一〇月二八日、県令の合同団結の訴えに出席者から異論が出なかったとみえ、「翕合団結ノ大体」が決まり、翌二九日工藤行幹の旅寓において「従来存在スル所ノ某ノ会某ノ社ニ拘ラズ、広ク有志ヲ翕合スベキ」旨の決議書に一同捺印した。『青森県総覧』（東奥日報社、一九二八年）によれば、この時本多が起草した檄文は「一、勅諭に奉答して政治思想を煥発せしむ。二、学校を盛にして智識を拡充す。三、産業を盛にして国本を固ふす。」という内容であった。

問題の一〇月二八日について記した史料が弘前市立弘前図書館所蔵一

般郷土資料の「笹森儀助雜綴」(文書番号KK・〇四九・ササ)第一五冊の中にある。笹森の筆になるこの無題の史料は末尾に「右始末ノ事件遺志及誤聞ノ廉アルヘクモ記憶ノ儘書シテ以後日備忘トス」とあることから絶対視は出来ないが、後出史料Eと重なる点もあり、当日の状況をうかがわせるに足る史料である。前日の県庁出頭から書き出されているが、一〇月二八日の関連部分のみを引用する(以下、史料引用において、①原文に句読点のない場合、適当と思われる箇所に付し、②変体仮名・合字は通常の仮名に改め、③漢字は常用漢字に統一した)。

〔史料A〕

県令談曰フ今日諸君ヲ御招キ申セシ所以ヲ私ヨリ先ツ陳述スヘシ、抑弘前ノ地タル是迄ノ景況ヲ以テ其人氣ヲ察スルニ大方ハ分烈セシ姿ニテ為メニ勢力モ不振ス日々衰頹ニ赴キ候ニ付今日ヨリ大團結シテ政談ナリ学事ナリ勸業ナリ着実ニ更張為致候、乍併輕躁ニシテ古典ニ相觸ルゝ様ノ事有之候テハ遺憾ニ付右様ノ事コレ無キ様致度シト云フ。石岡曰弘前一地方ノ事ニ付唯今ノ御談ニテハ甚迷惑ナリ、決シテ其人氣ハ四分五烈ト云フコトモナシ、委細ノ事情ハ郡長ニテ存居候得ヘハ別ニ私共ヨリ申上クルニ不及ルモ宜カルヘシ、然ルニ分烈ニ付團結云々ノ義県庁ヨリノ御差函ニテハ甚迷惑ナリト云フ。館山曰フ令公ノ御談至極尤ナリ、私共亦此ニ見ル所アリ、故ニ当春已来有志諸君ト義塾ニ集合シテ協同社ヲ設ケ盛ンニ團結ヲ謀ラント据拮勉勵殆ト成ルニ垂ントス、乍併書生会ニテハ不佳ニ付大道寺君ヲ社長ニ仰カント再三依頼スレトモ聞カス、過般山野銀次郎宅ニテ陳情ノ通ナリト。大道寺右ニ付答弁アリ。県令曰然ラハ是迄ノ如ク

弘前ノ事ハ放任シテ置クヨリ他ニ方法ナカルヘキ歟。

大道寺曰願クハ一致ニ致度候得共旧藩爾来党派モアル土地柄故今日迄ノ姿ニ相成候云々、依テ是迄ノ協同社ニ関セス一層盛大ニ一社ヲ設立スルハ可然也。工藤モ同論是迄ノ協同社ニ寄ラス彼我共新ニ設クルハ世人疑惑ナク返テ加入ノ道モ広ク更ニ設クルハ好都合ト云フ。大道寺又曰。間談齟ッテ兼テ牧場等ノ事ニモ及ヘリ。蒲田曰令公ノ弘前ヲ案セラルゝハ難有仕合ニ付何レモ思召ヲ体認シテ乍不及尽力可仕ト一統申述タリ。赤石曰我モ協同社ノ一人ナルカ該社モ追々人数減少セリト。館山困却ノ色アリ弁シテ曰殊更ニ少ナク致セリ減少ニアラス。赤石亦曰云々。論議セントスレハ菊元傍ヨリ云々ヲ唱ヘテ館山ヲ救ヘリ。大道寺曰牧畜資金モ同一ニ致シテ可然哉。

館山曰該資金等ハ決シテ入ルゝヲ望マス、山野ノ養蚕ハ山野ノ社ニテ可扱、牧畜ノ業ハ其発起人ニテ可扱、各其主意ノ本ヲ極メタル人ナラテハ他人ノ能ク弁スルモノニアラス。

赤石曰該資金ヲ出シテモ取ラサルト問フ。館山然リト決答セリ。工藤曰中津輕郡ハ本ナリ、拙ノ異見ヲ如何ト再三問。拙答ヘス。一町田曰此事只大道寺ト君笹森郡長ハカリ責ムル和解ノ者ニアラス、一統申合セテ可然。

拙病人「郷田書記官」ノ前ニ争フヲ欲セス、黙候。唯一度曰令公ノ我カ郡下ヲ愛スル実ニ親切ナリ、苟モ然ラハ令公自ラ弘前ニ出張シテ大ニ会議ヲ開キ、弘前ノ目的ヲ定メテ被下サルゝ旨答ヘタリ。坐中口ヲ揃ヘテ夫レハ出来間敷ト喋々其不可ヲ鳴セリ。

結局一統一團結ヲ謀ルニ決セリ。

まず第一に注意したいのは、共同会が決して一枚岩ではなかったことである。山田県令の調停を石岡が「甚迷惑」と拒絶したのに対して、館山は「至極尤」と受け入れている。また、赤石が「追々人数減少セリ」と共同会の伸び悩みを吐露したのに対して、館山は「殊更ニ少ナク致セリ減少ニアラス」と困却気味に弁解し、「論議」に及ぶほどであった。第二に反民権派の大道寺・笹森らが積極的に持論を展開することなく、大同団結を望む県令の思惑に屈して、「結局一統一団結ヲ謀ル」ことに決したことである。多勢に無勢という雰囲気は明らかであるが、兩名の辞職後この経過が非難され、共同会から「兩人若し団結論に不服ならば集会の座において充分議論すべき筈なるに此に出でずして彼に出づるとは嗚呼何等の心ぞや」と疑われたのである（小野久三『青森県政治史(1)』東奥日報社、一九六五年、五〇〇頁）。

第三は翌八二年二月創業の士族授産会社農牧社と思われる「牧場」の経営についても話されていることである。大道寺の「牧畜資金モ同一ニ致シテ可然哉。」との提案を館山は「該資金等ハ決シテ入ルヲ望マス、……牧畜ノ業ハ其発起人ニテ可扱」と退けている。また、「赤石曰該資金ヲ出シテモ取ラサルト問フ。館山然リト決答セリ。」とあるように、この問題についても共同会の共通認識はなかったらしい。

事件の発端を共同会はどのように受けとめていたのだろうか。一〇月二十九日の自由党結成式に参加した服部吉之丞の書簡にそれがうかがえる。国立国会図書館憲政資料室所蔵の品川弥二郎関係文書中の「在京期成同盟出会委員服部氏ヨリノ来信」（文書番号一二〇三）は、自由党結成の様子を記したのち、共同会の活動状況ならびに館山の郡長就任についてつ

ぎのように記している。

〔史料B〕

○一、弘前部通常会開会ノ始末

右ハ本月十八日午後当会所ニ於テ開会セリ。此ハ尤モ去九月中ニ開クヘキ筈不都合ニテ本月ニ延会相成則其議決条件ハ左ニ御座候。○生産科ニテ実地開墾事業ニ着手センカ為メ、左ノ地所ヲ其筋ヘ拝借願立ルコト○中津軽郡原ケ平字山中十八番地ノ内反別四拾九町歩○西津軽郡深浦村沢辺村領ノ内反別五百四拾五町歩。

一、開墾事業ノ着手方法ハ有志即其従事者ニテ調査議定スルコト

○一、法律科業ノ規則手続等モ其科員ニテ調査議決スルコト○一、板垣氏東北ヘ遊行ニ付、東奥共同会ニ於テ招待致スヘキコト△此ハ過ル廿一日山形県酒田港尽性社ヘ照会ノ処、板垣氏ハ宮城県ヨリ直ニ帰京ノ由此地ニモ来ラズトノ回答アリタレハ、多分本年中心ハ兎テモ此地ヘ来ル杯ハ望ムベカラザルカ遺憾々々。

○一、会幹館山漸之進氏青森郡長奉職赴任セリ。

○此ハ共同会弘前部委員諸君ト協議ノ上県令ノ懇望ニ従ヒ余義ナク奉職スルコトニ成レリ、併シ共同会員ヲ脱シテノコトニハアラズ、益々共同会ノ為メニハ便宜ヲ謀リテ尽力スル積リ、苟モ吾々ノ主義上ニ於テ妨碍アレハ何時ニテモ退職ノ心組ニテ赴任スルコトニ成タリ、詳細ハ本大会「共同会各郡委員総会」ニ御来会ノ節逐一御談ニ及フヘシ。

我青森県令ニハ俄然面目ヲ更メテ自由政治家ト成レリト。

○此ハ近来珍奇ナルコトニシテ驚愕ニ余リアリ、然レトモ是全ク世

上ノ風潮感動セラレテ面目ヲ變更セシモノナルヘシ、夫レ輿論ノ希望スル自由ノ方針ニ從ヒ愈施政セバ又人民ノ為メ実ニ賀スヘシカカリ、故ニ此頃県令ハ各郡ノ郡長ヲ会シテ将来施政ノ方向ヲ一定スヘシトテ既ニ夫々各郡長ヲ青森ニ招集セシト、然ルニ又其会ニ吾カ共同会委員諸君ニモ悉ク臨会アリテ協議スル所アリタシトノコトニテ本多菊池石岡ノ三君モ既ニ青森港ニ参ラレタリ、偕館山氏ノ郡長ヲ奉職スルコトニ成リシモ亦県令ノ斯ク自由政治家ニ成ラレタレバナリ。

○本月ノ各郡委員總會開期ノコト

此ハ規則ニ拠レハ本月中ニ開会ノ筈ナレトモ、彼是都合向ニ依リ何レ来十一月初旬ニ開ク積リ末タ期日ハ定ラサレハ追テ取究リ次第御報ニ及フヘシ。

右ノ条々此段略報ス、其御部中へ遺漏ナク御報告アリ度シ。

十月卅日

東奥共同会々所

木造村今魁一様今規雄様外諸君、西津輕郡役所詰生駒如保様外諸君

これによれば、館山の郡長就任は「共同会弘前部委員諸君ト協議ノ上」決定され、共同会側は勢力拡大につながらないのなら「何時ニテモ退職ノ心組」であつた。二度にわたる「県令、自由政治家ニナレリ」との記述は共同会の勝利宣言であらう。と同時にこの史料は共同会の内情についても知らせてくれる。共同会弘前部は開墾事業を担当する生産科と法律科の二部門を持ち、共同会全体は各郡委員の總會によって運営されていた。また、自由党結成を直前に東北遊説していた板垣退助を招致する

予定でもあつた。

ところで、共同会、反民権派のいずれにも属さない士族らはこの県内有志者の合同策をどう見ていただろう。県令の真意はいろいろ取り沙汰されたが、青森市在住の杉山丕氏所蔵の杉山家文書の中に関連史料がある。石田三成の末裔である杉山家には近世以降の大量の文書を所蔵されているが、近現代部分は幕末から維新时期にかけて家老・権大参事を勤め、中・北・南津輕郡長を歴任した龍江とその長男で東奥義塾長などを勤めた薫之進に関する文書である。つぎに掲げる史料の差出人のうち田中坤六は龍江と交遊があり、一八七八年東京警視庁警部となり、当時世間を騒がせた高橋お伝の逮捕に功績があつた『青森県人名大事典』田中坤六の項。吉崎棟一も巡査出身であり、七四年の台湾出兵の際、龍江と義勇団集会所を東京に結成した（『津輕承昭公伝』三三三―三四頁）。こうした関係で杉山家文書に収められているのだろう。

〔史料C〕

坤六等謹而山田青森県令閣下ニ言ス。聞ク閣下牧民濟世県治ヲ求ムルニ汲々トシテ専ラ改進黨ヲ求メ鋭意治ヲ図ルト。是ノ故ニ本年十月ノ聖詔ニ依リテ県下士民ニ聖詔ノ旨趣ト将来ノ結果トヲ明示シ、第一教育ヲ盛ニシテ智識ヲ開キ、第二事業ヲ興シテ殖産ヲ優ニシ、第三同志ノ士民相團結シ相親睦シテ智識ヲ交換シ戮力協心公益ヲ謀リ資産ヲ保有シテ他日国会議員タルノ資格ヲ準備セサル可カラサル所以ヲ明諭シ、県治ノ改革ヲ為シテ悉ク旧弊ヲ洗滌シ事務ヲ改良セントス。是ヲ以テ一二郡長ヲ撰拔スルアリ。同郷ノ人士苟モ志アル者豈ニ是ノ美挙ヲ賛成セサル

者アランヤ。然リト雖トモ閣下意外ノ英断ニ出ルヲ以テ或ハ夢想ヲ懷ク者アリ。坤六等尚疑團ヲ免カレス、一朝面謁ヲ請テ初テ閣下ノ断然確実ナルヲ信ス。坤六等同郷人士ト此ノ感ヲ同シ、実ニ欣躍ニ不堪也。是ニ於テ聊カ愚意ヲ陳シテ閣下万一ノ参照ニ供セント欲ス。夫レ本県弘前ノ地ハ藩祖創業ノ城地ニシテ往時辺隅ノ一都城タリト雖トモ地勢一方ニ僻在シテ、山海江河ノ便殖産授業ノ富アルニ非ラス、當時封建ノ制度ニ因リ人造城砦ヲ占メ士民ヲ群集セシムルノ地ナリ。是ノ故ニ肉盡テ人散スルノ理ニシテ、方今城地変シテ原野トナリ、松栢テ薪トナルノ悲歎ヲ来タス。亦可憐ノ至リナリ。伏シテ其人情ヲ察スルニ固陋頑冥ニシテ智識暗ク氣力乏シ故ヲ以テ改進黨ヲ成サント欲スルモ亦実ニ難シ。然レトモ此ノ旧弊ヲ改良セスンハ往々氣力消耗シテ士民徒ニ号泣スルノミ。閣下早ク既ニ此ニ見アリテ救時ノ策ヲ為サント欲スルハ実ニ感歎ニ不堪也。然リト雖トモ旧習ヲ被リ、改進黨ヲ採ルニアラスンハ是ノ誠意ヲ貫クコト能ハサルハ固ヨリ論ヲ俟タスト雖トモ、顧フニ教育ト殖産トハ相待テ終始ヲ為ス者ニシテ教育足レハ智識開ケ智識進スレハ事業從テ興張スルハ自然ノ理ナリト雖トモ、是レ恐クハ数十年ノ後ニアラサレハ成果ヲ見ル能ハス。若シ単ニ教育ノミヲ奨励スルモ勢ヒ改進黨ヲ得サラン。且教育ハ理論上ニ源溯シテ殖産事業ハ實際上ヨリ成出スル者ナレハ頗ル難事ト為ス。而シテ救時ノ策是ヨリ急ナルハナク、治蹟ノ効亦是ヨリ大ナルハナシ。

故ニ閣下為スコトアラント欲セハ、教育殖産ノ両全ナラシメンコト

ヲ希望ス。果シテ然ランニハ広く有志ヲ募集シテ県地ニ一大会社ヲ創設シ協心同力事ヲ營スルニ如カサル可シ。然ルトキハ県庁非常ノ恩典ヲ以テ多少ノ資金ヲ貸与シ、特別ノ保護ヲ為サ、ルヲ得ス。而シテ旧藩知事ト協議セラレテ其加入ヲ請ヒ、牽聯事ヲ謀ルトキハ人心觀感シテ、忽チ團結ヲ為シ一大会社ヲ創設シテ事業ヲ興サンコト疑ヲ容レサル所ナリ。是レ坤六等閣下ニ強請スル第一ノ要点ナリ。其会社ノ旨趣方法ト組織ノ如キハ別ニ之ヲ論ス可シ。

第二閣下是ノ英断ヲ為スニ於テハ願クハ人材ヲ用フルニ吝ナラサルンヲ要ス。顧フニ改進黨ノ者勢相連結セスンハ俗党ヲ破ルコト能ハス。弘前ノ地其人ニ乏シキヲ以テセス。壮年世故ニ通スル者其適否ヲ採択シテ任用アランヲ望ム。

第三凡ソ人ノ思想ハ檢束ス可カラサルモノナリ。故ニ一旦任用セラハル、モ政談講学ヲ目的トシ、或ハ自由主義ヲ主張シテ聖詔ノ旨趣ニ背馳スル等ノ誤謬ナキヲ保シ難シ。加之ナラス團結ノ余勢遂ニ如何ノ結果ヲ成サンモ亦知ル可カラス。若シ一タヒ破壊シテ閣下ノ誠意ヲ貫カサルニ於テハ患害並至リテ其弊ヤ却テ閣下ノ干渉セサルヨリ甚タシ。是ノ故ニ警察ヲ嚴ニシテ視察怠ル可カラス。是第三ノ要点ナリ。

今此ノ数件頗ル粗漏卑言ナリト雖トモ、坤六等閣下銳進治ヲ図ルノ誠意ニ感シ自ラ陋劣ヲ顧ミス面謁一言ヲ呈セント欲ス。然リト雖トモ、閣下帰県ノ急ナルヲ以テ言ヲ謁ス能ハサランヲ恐レ勿卒一書ヲ奉呈ス。庶幾ハ閣下之ヲ諒察セラレヨ。不敬罪当万死頓首々々。

明治十四年十二月廿一日 青森県士族 田中坤六

田中らは県令による館山・菊池の郡長任命を「美筆」と賞賛しつつも、「旧習ヲ被リ、改進黨ヲ図ランニハ一二郡長ノ能ク為ス所ニアラス」として、三点を提案している。

第一は教育殖産の勧めである。とくに一大会社設立による殖産興業を県庁が保護育成し、旧藩主を経営陣に迎えることが企図された。第二は人材登用である。「改進黨ノ者勢相連結セスンハ俗党ヲ破ルコト能ハス。」と幅広く人材を確保する必要を認識している。第三は「自由主義」者の破壊的活動を防止するためにも警察力の拡充が求められている。この点は田中らの職業柄当然の希望ともいえるが、ここでは彼らが県内の政治勢力を「俗党」・「改進黨ノ者」・「自由主義」者の三つに区分して、「改進黨ノ者」に親近感を抱いていることに注意したい。館山・菊池といった共同会Ⅱ「自由主義」者の郡長任命をきっかけに、「改進黨ノ者」の県政登用を促すことで、穏健な路線を定着させようとする立場であったといえよう。

三 反民権派の辞職

県内有志者の合同団結を決めた一〇月二八・九日の会合ののち、郷田書記官が元青森県令北代正臣に宛てて認めた書簡（十一月二日付、『保古飛呂比・佐佐木高行日記』第一〇巻所収）は我が身についてつぎのように語っている。

同社「共同会」中自然僕ヲ退クルノ策アリ、県令又同意ナラン、（僕ハ、去年同社中ノ者国会請願トシテ出京ニ付、農商家トモ巡回、金五銭ツ、一戸ヨリ募集スルヲ、厳シク警部ニ命ジ取締リタル故ニ、僕ヲ悪ムノ情アリ、）……僕ノ一身、彼レ等ノ策ニ、先達テ退クノ外ナシト存候、何卒御序アラバ、三卿「内務・大蔵・農商務の各卿」ノ内へ御話シ置被下度、既ニ七十余ノ老母アリ、又、病氣後寒地有害ノ次第モ有之、是非何方ニテモ転勤致シ度候

郷田はえらく弱気になっており、政府中枢による事態収拾を期待する節もある。また、数日後になされる笹森・大道寺の辞表提出を「同人儀」「笹森」此上奉職ノ念ナキを以テ、辞職、大導寺モ又議長并常置委員ヲ止メタリ」と既成事実として報告しており、郷田と笹森・大道寺らの密接な関係がわかる。

大道寺の辞職関係史料は見出すことができなかったが、笹森については前出「笹森儀助雜綴」第一四冊の中に関連史料が五点あった（史料D～H）。十一月一四日笹森は辞表を提出し、山田県令は却下する。この間のやりとりを記した史料である。

〔史料D〕

去月廿八日有志ノ人々ヘ対シ演述致シタル大意ハ、今般ノ勅語ニ基キ弘前士族ニ於テモ一和共同シ、資産興隆教育拡張ニ鴻益ヲ起シ、明治廿三年国会開設之節ハ代議士輩出スル様今日ヨリ準備無之テハ不相成事ト考候得トモ各々ハ如何被見込候哉ト咨询セシニ外ナラズ。然ルニ其節各有志輩ノ答ニハ大意ニ於テハ至極ノ事ニ付右ノ順序ヲ相談決定ノ上猶可通知トノ事ニテ翌日結社等ノ手続書ヲ被差廻候次

第二付本書トハ趣意大ニ齟齬致シ居、小官ノ演述ヲ如何被聞取候哉了解致シ兼候。前条ノ事柄ニ付辭職致サレ候理ハ万々無之事ト相考候得共若不落意ノ事モ有之候ハ、面接ノ上親シク承度因テ辞表ハ致返却候事。

明治十四年十一月十七日 青森県令山田秀典 ㊟

山田県令によれば、一〇月二八日は国会開設へ向けた準備を諮問したのであって、翌二九日に「結社等ノ手續」をするなど見当違いも甚だし、私の提案を「如何被聞取候哉了解致シ兼」ねる、これを理由に辞職することはまかりならん、というわけである。しかし前出史料Aによれば、二八日の席上すでに一大結社の必要が論じられている。慰留の理屈にしては弱すぎた。納得できない笹森は県令批判に出る。

〔史料E〕

御懇諭ノ趣敬承左ニ陳述仕候

一、在来ノ共同社ハ純粹ノ民権論者ニシテ既ニ社名ヲ以テ奥羽七州同盟社員ト往復致シ候体ニ付右等ノ者へ官吏ノ身分ヲ以テ交通致シテハ少シク朝廷ノ嫌疑ヲモ会釈シ、且ツ官吏等ノ身ヲ以テスルハ真正ノ民権社ヲ組織スルノ難キヲ悟リ、故ニ該社ニハ知己友人モ多ク有之候得共慎テ交通不致ナリ。過日伊東七等属出張ノ際、拙ニ該社へ加入ノ儀再応談示有レトモ断ニ及ヘル所ナリ。

一、過ル廿八日出頭ノ際

勅諭云々御談之節、弘前人ノ郡長ノミ御呼出ニ相成リタリ。畢竟単ニ前陳ノ事ノミナラハ各郡長同一ニ呼出ハ勿論ト存スナリ。如何トナレハ、士族ハ弘前ニ限ラス八郡合併ノ県ナレハ各郡共ニ士族ア

リ、是迄ハ總テ閣下公同ノ御主旨ニテ専ラ弘前ニノミ御憂慮ノアルコトト思考セリ。

一、御談示ノ席ニ弘前人ノミナラス、伊東七等属并共同社幹事トカ委員トカ三名出席セリ。是レモ何レノ人ノ招キナルヤ存セサレトモ、役員ト共ニ列スル上ハ長官ノ命ト思考セリ。其際、石岡周右エ門^(乳父)云ク、弘前ノ事情ハ郡長ヨリ詳細御聞取可然、且ツ共同社ト軌リ合フ事ナトハ決シテ是レナク、郷里ノ事ニ長官迄ヲ煩ハシハ耻カシキ旨陳述シ、尤ノ事ト思考セリ。

一、愚考ニハ信ニ一致協同ノ社ヲハシメントナラハ一社員ニ限ラス広ク町村議員等ノ民理有スル者ヲ召集シテ御演達アルヘキ筈ト思ヘリ。然ルヲ本県人ニアラサル伊東七等属ト一二ノ共同社員トノミヲ同一ニ会セシメタルヲ見ルトキハ別ニ事情ノ外ニアルヘキコトト思考セリ。

一、一ノ郡長曰、大道寺并弘前郡長共同社ニ加入スレハ一団結ニ至ルヲト発言セリ。又一ノ郡長曰ク、是ハ大道寺ト弘前郡長ノミヲ責ムヘキニ非ラスト。救済スレトモ閣下一言ノ是非スルナケレハ、其實ヲ吾輩ニ帰セリト思考セリ。是ノミナラス、御通聲ノ際帰途閣下ノ面前ニ於テ共同社云々ニ関シ大道寺ノ該社へ加入セサルヲ責ムル者アレトモ、閣下一言ノ是非スルナシト。然レハ今般ハ該社員ト一致、更ニ一社ヲ設、為ス所アラン御主義ト思考セリ。

アラマシ右等ノ思考ヨリ出テ、不肖其實ノ免レサルヲ悟リ、狂愚本書ヲ以テ上願ニ及ヘリ。

御懇命ニ從ヒ疾走拜館陳述可仕筈ノ処、不快ニテ心底ニ任セ兼無規

病辱中執筆陳述仕候。泣血頓首。

明治十四年十一月十七日夜認

笹森儀助

県令山田秀典殿

笹森に言わせれば、これまで事ある毎に共同会への誘いがあり、まるで大道寺と自分さえ首をたてに振れば、県内の大同団結になるといったプレッシャーを受けてきた、二八日の会合は多数を頼んで我々を共同会もしくはそれを土台にした新結社へ入会させようとしたのではないか、ということであった。

〔史料F〕

其方法左

閣下自カラ進テ県令ノ難ニ当レ、決シテ大政府ノ為メニハ辞スル勿レ。

弘前ノ郡長ハ内務省ニ請ヒ当分ノ内本省ノ信任アル人ノ威望アル潤達莊嚴ナル者ヲ置クトキハ令セスシテ国会党自カラ消散シテ官途ニ糊スルノ方法ニ変スヘシ。然ル時ハ県下静寧大政府ノ一堅城タルニ足ル結果ヲ得ル数十日ノ中ニアリ。閣下以テ如何トスルヤ。

皇室ノ微忠者

〔史料G〕

述懐

県令定見ナク輕敷議ヲ信シ真ニ

皇室ヲ憂フル我輩ヲシテ如別紙協同社員ト親睦セシメ、一団結ヲ謀ラシメント欲ス。

皇室ノ御為ナル政略何ノ点ニアル、万一過テ我カ輩^(不明)□□県令ヲ補ケ

ハ遂ニハ仏国ノ転覆ヲ視ル鏡ニ照ラシ如シ。請其一端ヲ陳セン。国会ヲ開クハ我人希望セサルニ非ラス、其議員ニ乏シキヲ如何センヤ、夫レ国会議員ナル者ハ第一法律經濟ノ二学ニ通セサルヘカラス。第二全国ノ地理人情ニ通セサルヘカラス。第三万国ノ形勢ニ通セサルヘカラス。抑モコノ三箇ニ通曉セルノ人我県下四拾七万人中アルヤ、決シテアルコトナシ。資力ノ豊ナラサルヘカラサルハ是外ニアリ。況ンヤ饑餓目前ニ迫ル窮士族^(小字部分以下同)ハ我モ其一人ナリ、嗚々嗚々何ヲ為サンヤ、万一其志ヲ遂クルヲ得ルモ

皇室ヲ危フシ、朝憲ヲ混乱スル而已。

是ハ儀助ノ区々ノ情止ム能ハス。依テ閣下ニ陳シ閣下万一視ルヘキアラハ速其筋ノ参考ニ供セヨ。然ル時ハ県下四十余万人ノ洪福ノミナラス、幾分カ

皇室ヲ保護スルノ勲アラン。誠恐頓首。

明治十四年十一月二十日

追而別紙探偵書ハ造次ノ間ニ写シモノニ付誤謬モ多シト雖トモ意氣ヲ要スル件ニ付原紙ヲ以テ呈上ス。願クハ速ニ魯ノ虚無党ノ如キ巨害ヲ成ニ至ラサルニ某議ヲ伐テ無刑二期スルノ方法ヲ設ケンコト至願ニ堪ヘス。

史料Gは県内には法律学・経済学に詳しく、全国の地理・人情に通じ、世界情勢に明るい国会議員にふさわしい人材がいなかったことが反民権の理由であることを示している。

ところで、笹森・大道寺の辞職は共同会と山田県令の圧力への抵抗だったと断定しうるだろうか。つぎのような興味深い史料もある。

〔史料H〕

肅呈本月二十日並廿二日附之御手書本日午後落手仕候。定て元三郎より之返書ハ御待ニ可有之と存候処より過刻電信ニテ御書落手之旨申上候儀に御座候。

書記官への御書面ハ今日退庁否ヤ元三郎持参書記官へ面会之上相渡申候間御安心被成下度奉願候。其時生憎工藤行幹来り書記官へ御説も不申元三郎ハ帰宅仕候。書記官より何ニか用事之有之様にして否又々来ルべしとの仰ニ付一両日中拜走之上親しく面語致候処ニテ万事可申上候間左様御承知相成度奉願候。

書記官より老兄へ昨日書面差出候よしニ付御落手なるべし。是ハ土手町葛西宇八郎ニ相預け候よし。

書記官より老兄へ差出候書面も元三郎へ御預け相成り積りニ御座候ニ付左候ハ、元三郎より書留ニテ御郵送仕り可申候。

館山ハ中ノ郡長ニ転任之よし実ニ都合と奉存候、此際彼自滅可申候、刀ヲ借して頭を斬らしむるとハスル事なるべし、元三郎等ノ思考ニハ後來ノ手続之為メ大都合ニ御座候、弘前ノ人民ハ大噪ひニ可申候、県令の不明も亦甚しき事ニ御座候。

長尾義連ハ東ノ郡長ニ任せらるゝ積りニ御座候、明日夫々発行可致都合之よしニ御座候。

老兄之免職も明日前同様聞届らるゝ都合之よしニ御座候。

県官などハ実ニ謀るニ足らざるなり、頃日小野武漸来り弘前ニテ何れの方強きやと語あり、元三郎ハ憤怒ノ余り前途禍福ヲ見て事を議するハ人傑にもあらず正義にもあらずと断定せり、人情多くハ如斯

憫笑之至リニ御座候。

上京ノ事ハ県令ニ先達実ニ^{〔不明〕}心なり、此際変ニ応するの名案ありや、一工夫相成度元三郎も同様ニ思考候得共未だ好案なきなり、為メニ精神ヲ悩すこと多くなり。

他ハ又々書記官と面語之処ニテ可申上候間左様御承知奉願候、不一元弟再拜印

十一月廿四日午後十時

笹森老兄座下

元三郎なる人物については不明だが、文中に、郷田書記官―元三郎―葛西宇八郎（弘前土手町の旅館業者）―笹森、といった人脈がうかがえる。ともあれ、元三郎は笹森の辞職にともなう館山の中津軽郡長転任を反民権派にとって都合であると評価しているのである。すなわち、「此際彼自滅可申候、刀ヲ借して頭を斬らしむるとハスル事なるべし、元三郎等ノ思考ニハ後來ノ手続之為メ大都合ニ御座候、弘前ノ人民ハ大噪ひニ可申候、県令の不明も亦甚しき事ニ御座候。」と観測している。中津軽郡役所において書記内藤吉郎太・伊藤正良らが笹森と行動を共にし、館山が赴任すると、書記菊池楯衛・谷口永太郎・成田邦彦・太田静をはじめ、筆生数名が一斉辞職した。反館山派はさらに笹森復職あるいは郡長公選を主張して、同調者を募った（『弘前市史・明治大正昭和編』四三頁）。反民権派の筆になる後出史料Jによれば、館山が赴任した際、郡役所に出頭した役人は僅か三名で「事務整理スヘカラスシテ殆ント無政府ナルカ如シ」状態であったという。

反民権派は館山を立ち往生させ、ひいては館山を重任する山田県令の

「不明」を攻撃しようと目ろんだのではなからうか——勿論、館山も共同会員を書記に任命することで応戦するが。元三郎は菊池ではなく長尾義連の東津輕郡長任命を報じている点、情報が混乱しているが、笹森サイドのある一定の思惑・打算を推測することも可能ではなからうか。

この推測が可能ならば、史料Fに見える「弘前ノ郡長ハ内務省ニ請ヒ当分ノ内本省ノ信任アル人ノ威望アル潤達莊嚴ナル者ヲ置クトキハ令セスシテ国会党自カラ消散シテ官途ニ糊スルノ方法ニ変スヘシ。然ル時ハ県下静寧大政府ノ一堅城タルニ足ル結果ヲ得ル数十日ノ中ニアリ。」という箇所は、郡長人事に政府を介入させることで一挙に民権派を壊滅させ、反民権の全国的拠点にしようという狙いに読みとれる。

このことを示唆する史料が前述した杉山家文書の中にある。年不明二月五日付書簡（下書きと思われる）の中で龍江は笹森の人物についてつぎのように書いている。

「史料I」

此人ハ才幹胆力余子ニ超出セルニハ相違無之、或ハ有為ノ人物ト御認メ相成候モ一応御尤之義ト被存候。然レトモ其實際ヲ觀察スレバ、謙遜志実ヲ粧点シテ巧ミニ上下ヲ瞞着シ（葛西音弥力如キハ常ニ彼レニ心配セリ）、陰險無辺之伎倆ヲ逞フシテ秩序ヲ紊ルヲ憚カラス、一朝機ニ乗シテ己レカ慾ヲ恣ニセントスル者ハ彼レヲ置テ他ニ無之ト評スルモ敢テ剋評ニアラサルヲ信スルモノニ有之候。旧藩時ニ在テ山田登等ニ阿党シ、窃力ニ君側ノ機密ヲ探知シタル行為、山田秀典氏之晩節大道寺ヲ教唆シテ共ニ抵抗シタル挙動、其他牧場ニ関スル件ノ如キ、郷田氏ヲ籠絡シ山田県令ヲ欺罔シ、岩公及松方殿等ニ

取入リタル手段等ハ今尚其痕跡ヲ留メテ歴々タルモノニ有之候。此般ノ偽君子ヲ御採用之事ハ龍江職分之内外ヲ顧ミルニ違アラス。断シテ不可ヲ表セサルヲ得サル義ニ有之候。

この書簡は年不明であるが、内容からして弘前事件後であることは明らかである。横山武夫『笹森儀助翁伝』（今泉書店、一九三四年）によれば、笹森が漢学者葛西音弥に学んだのは明治二〇年前後であるから、明治二〇年代であろうか。

龍江は幕末維新期の弘前藩において家老・権大参事の要職にあり、主席家老・大参事の西館宇膳を助けていた。笹森は西館宇膳の藩政担当に不満を抱きつづけた山田登に強い影響を受けていた。こうした事情から、龍江が笹森に良い印象を持たないことは当然であろうが、「山田秀典氏之晩節大道寺ヲ教唆シテ共ニ抵抗シタル挙動、……郷田氏ヲ籠絡シ山田県令ヲ欺罔シ、岩公及松方殿等ニ取入リタル手段等」というように、事件の中心人物を郷田でも大道寺でもなく、笹森であると見ている。先ほど検討した史料はその笹森のもとに集まっているのである。

四 不平士族の動向

郷田県令の就任、館山・菊池らの下野ののち、県政は反民権保守派の支配するところとなっただろうか。郷田は佐々木高行にあてた一八八二年二月五日付書簡（『保古飛呂比・佐佐木高行日記 第一一巻所収』で「其後、弘前并南部地方共、全ク事件モ漸ク今日鎮撫ノ姿ニ相成候へ共、弘前ノ如キハ、現ニ二党ニ相分レ、相諍抗候得共、近來ノ姿ニテハ、格別

ノ事ニハ相成間敷ト存候」と一応の平静さを書き記しているが、当時農商務省翻訳局の吏員であつた陸羯南は農商務少輔品川弥二郎宛の同年四月一四日付書簡(『陸羯南全集』第一〇巻所収)において、つぎのようにのべている。

陳ハ笹森儀助来京、此頃尋来り、県下事情委細被話、且彼本多、菊池等の挙動も大略探居候様子、原田生の事も同意の旨被表、乍去同氏ハ専ラ開墾の事ニ尽力中なれば、可成彼の小児輩と争ひ度なしと被陳、一応尤もの様に承候得共、当時世勢の有様ニ照して見れば、碌々世事外ニ逍遙すべき事情にも無之、幾分か政事区域内ニ其思想を運ばざれば、其業も自然妨害せらるゝ事も可有之旨、懇々説破致候処、同氏ハ頗ル覚悟の様子ニ相見候。……本多、菊池の徒は郷田県令を追ひ、赤川書記官を県令と仰候志ニテ種々周旋中の趣承候間、是亦御参考の爲申上候。現今郷田君を追ひ候事は県地(就中弘前)の人心も幾分か響影を及すへき有様も有之旨、笹森氏被申候。是も尤もと被存候。原田氏より書面ニハ県地ニテモ大分同志者を得頗ル尽力中なる由、併し田舎丈更ニ学力及才識の相応なる人に乏しく、中々政党組織にも不容易状態と遙々悲歎致居候。

笹森が農牧社創立(五月二四日)を前にして忙しかったこと、反民権派政党(陸奥帝政党)の結成が容易に進まなかつたことなどは、従来も指摘されている点であるが、共同会が赤川憲助大書記官(この年一月内務少書記官に転出)を推して反郷田戦線を追求している点は注目してもよいだろう。三月、大道寺辞職にともなう中津軽郡の県議補選で当選したのは共同会員の寺井純司だったし、共同会員の赤石行三が県会副議

長に就いている。さらに、一〇月の県議改選において民権派の進出はめざましく、とくに中津軽郡は定数五名中、非改選の寺井をはじめ、本多・館山・菊池が選ばれるという圧勝ぶりであつた。

また、民権派の拠点東奥義塾はこの年一月の文学専門科に続き、五月には法学専門科を設置して慶応義塾から津田純一を招聘した。津田は本多らと政談演説会を行っている。

こうしたことから、反民権派は東奥義塾非難を高める。同年九月と一〇月に原田敢・乙部敢が旧藩主津軽承昭に呈した請願書(「皇漢学塾再興に付き旧藩臣某等頓首して白す」「旧藩臣某等叩頭泣血再び書く」)の二通、『青森県総覧』五五〇五七七頁所収)は、「義塾の法律学を講ずるは今日地方の情勢に適すべきか、義塾の政治論を唱ふるは教育専務の性質に合す可きか」と義塾の法学科設置に抗議し、「殿下の家に使役するものは旧習頑陋の徒のみ出入する者は浮薄無識のみ而して才学併備にして広く時務に曉通する者は東京に居るものと雖も敢て邸門に伺候して殿下の知を求めず、是皆侍臣の私曲を厭忌すればなり」と家令西館孤清らの家政専横を糾弾している。

また、旧勤王山田登一派も津軽家の家政改革を要求した。前掲松尾論文によれば、川越石太郎・七戸仲行が同年一〇月に呈した建言書は「県政ヲ錯乱」させる東奥義塾へ津軽家が助成するのは西館の専断によると批判して、旧藩主に対して「第一黒石正五位ヲシテ御家政向キ監督セシムルコト、第二御君側西館孤清ヲ始メ御一洗遊ハセラルベクコト、第三郷里臣民ヲシテ勤王ノ誠心ヲ勃興セシムルコト、第四危険ノ商法ヲ廃シ確實ノ御家政ヲ創立スルコト」を建言したという(八八〇八八九頁)。

川越らの上京の際、同志らが渡した委任状（弘前市立図書館所蔵岩見文庫、文書番号G K二一六・三七「雜記録」）によれば、「一、横川御邸御家令以下御改撰ノコト。一、勤王御誠意ヲ顕揚セラレ当地人民ヲシテ照準セシムルコト。一、危険ナル商業ヲ廃セラレ確實ナル御家政御確立ノコト。一、黒石正五位公ヲシテ御家政向キ監督セシムルコト。一、大道寺繁禎ヲシテ西館孤清ノ地位従事セシムルコト。一、御墓参トシテ御臨県請願ノコト。」が希望された。旧勤王山田登一派は大道寺を家令に就けることで家政改革を行おうとしたらしい。

その大道寺も佐々木高行宛書簡（一八八二年一月一〇日付、『保古飛呂比・佐佐木高行日記』第一巻所収）の中でつぎのように家政批判をしている。

旧知事家令・家扶ノ者共、昨年義塾ノ失敗ヲ顧ミズ、益自由・改進黨ニ結び、北津輕郡長工藤幹^{（行次）}、当春御用ヲ名トシ出京ノ折、家令西館孤清ノ命ヲ受ケ、屢自由・改進黨ヘ往復ノ末、旧知事ヲ欺キ、土族ニ就産資金ノ名ヲ以テ、五万円ヲ孤清持参、再ビ事ヲ謀ラントス、……一県ノ不都合ヲ図ルノミナラズ、到底政府ニ対シ、旧知事往昔勤王ノ功労モ、此際水泡ニ属セントスル、皆家令扶ノ謀ル所ニシテ、無知ノ旧君ヲシテ、面目ヲ政府ニ失ハシメントスル也

続けて大道寺は旧藩主承昭の弟で長岡家を継いだ長岡護美を後だてにして家政改革を断行したい旨のべている。結果的に西館の辞職後に家令に就いたのは旧家老・大参事の山中逸郎であり、翌八三年初めにおこる家政改革の動きも家令扶職務章程・財産管理方の制定にとどまり（『津輕承昭公伝』三八七頁）、家範・家政条規など本格的改革は一九〇四年津輕

英麿の時代になってからのことであつた（『津輕英麿伝』一五五〜一六七頁）。

ところで、幕末維新期から藩当局を糾弾し津輕家の家政改革を要求していた勤王派山田登の活動は彼の死後（一八七六年）も笹森をはじめ津輕平八郎・川越石太郎・兼平理左衛門らに継承され、自由民権運動に對抗していた。彼らと民権派の対立状況については岩見文庫にある山田登関係史料（文書番号G K二一六・一二九）の「主義邪正之儀具上」に詳しく、前掲松尾論文が部分的に活用している。紙幅の関係上、重要箇所のための紹介にとどめる。年代は記載されていないが、内容からして一八八四年頃と思われる。

〔史料J〕

一、明治十三年旧知事私立学校東奥義塾幹事本多庸一・菊池九郎等国会請願人名ヲ募ル。杉山龍江等モ大ニコレヲ賛成ス。同十四年菊池九郎上京、太政官ニ至テ国会請願書ヲ提出セリ。横川邸旧君側其^{（不明）}□ヲ知テ之ヲ制止セス、陰ニ怯フモノ、如シ。却テ旅費ヲ賜ハル等アリ。又、仙台ニ至テ陸羽同志者相会シテ国会請願スヘキヲ計ル。或ハ自由党本部ニ通款シ盛ンニ黨員ヲ募リ、共同会ヲ設ケ義塾ノ設ケアル教育ニ因ラス、却テ民権ヲ主張スル場トナセリ。又、本多庸一耶蘇ヲ信仰シテ邸内ニ寺一字ヲ設ケ教会場トセリ。是先年西館孤清君侯ノ同意ナルトテ彼ヲ誘ヒ菊池九郎モ又ソノ一部分タリ。西館孤清当年七十、棺ヲ覆フニ至ル。全キヲ求メンカ為メ君公ヨリ年々三千円ヲ資本金トシテ賜ハリ、又字田拾町余ヲ以テ充テシム。本多庸一ヲ以テ旧君家令後任タラシムルノ術ナリト至ル所金錢ヲ以テ人

ヲ誘引、東京官途又外ニ在テハ飯田異・三浦清俊・手塚義彦・成田五十穂・岡兵一其他多シ。分家津輕正五位〔津輕承叙〕ヲ以テ津輕家ノ統系ヲ争フモノトシテ誘シ、君側ニ反対セシムルヤ年深シ也。

〔中略〕

明治十四年山田県令從ヘル伊東珍英ナルモノト西館孤清ノ隨從ナルモノ等ト相計リ、大道寺繁禎・笹森儀助等郷田兼徳ニ因テ別政府アル如キカ爲ニ、共同相振ハサルトカニ出テ、共同会委員幹事等及津輕方面各郡長或ハ官吏等ヲ召集シテ、一団結ヲ計リ、其王域ヲ破ラントス。夫レカ爲メ、地方庁ニシテ民権云々ニ侵入スル。如何ソト大道寺繁禎県會議長ヲ辞シ出京シ、笹森儀助郡長ヲ辞ス。共同會員館山漸之進・菊池九郎等郡長トナル。東京ニ在テハ西館孤清人ヲシテ大道寺繁禎ヲ招トモ行カス。之無他彼ノ寒謀ヲ受ケタルモノハ館山・本多・菊池等ニシテ山田県令ソノ諸望ヲ拡メントスルニ參シテ県下沸騰セリ。山田県令同年十一月出京シテ大道寺ニ説カントシテ之行ハレス。弘前郡役所ハ館山赴任ノ後役員僅カ三名ノ出頭ニシテ事務整理スヘキカラスシテ殆ント無政府ナルカ如シ。辞シテ後任喜多村勲トナル。山田死スルハ十五年一月五日ナリ。県下有志電信及歎願書ヲ内務卿ヘ具狀シテ郷田氏ヲ以テ県令ノ後任ヲ願フ。惣代七戸仲行・菊池楯衛出京ス。遂ニ令ニ登ル。固ヨリ人トナリ温良ニシテ好悪ノ癖ナキ故カ敢エテコレカ進退ヲ甚シクセス。又故県令ノ着目ニ基ツキテ事業等ヲ奨励セリ。同年九月有志者相集評スル。西館孤清ヲシテ依然家令タラシメハ旧君侯ノ汚名ハ勿論其財産モ失却セント於是惣代二名ヲ出京セシメ利害得失ヲ直チニ呈書ス。長岡護美

侯・海江田信義コレニ干渉スル所アリ。遂ニ西館家令ヲ辞シテ山中一郎之ニ代ル。△白石同盟佐幕徒。▽家扶桜庭左次馬辞シテ佐藤清衛之ニ代ル。山中ノ從タルモノ。有志相望ム。大道寺繁禎ヲ以テ家令タラシメントスルモ、孤清党君侯ヲ擁護シテ我黨員ヲシテ後任タラシメント其術策実ニ巧ミニシテ惑ハサルモノ鮮シ。孤清退職名アツテ実ナキハ其同服ノモノヲ挙クルヲ以テナリ。何レノ時力真ニ改良シテ旧君侯ヲ輔ケスンハ後年悔ルトモ及ハザラン。

史料は西館の後任山中一（逸）郎や家扶桜庭左次馬の後任佐藤清衛らが西館の輩下であつて、「孤清退職名アツテ実ナキ」ことを強調している。史料が挙げる西館派は「ソノ主義ノ良否ヲ考慮セスシテ只管コレニ隨從スルモノ、徒ハ飯田異・三浦清俊・手塚義彦・成田五十穂・岡兵一・工藤行幹・櫛引英八・長尾義連・館山漸之進・赤石行三等ニシテ其他密議ニ預リテ孤清ニ氣脈ヲ通スルモノニハ本多庸一・菊池九郎・桜庭太次馬・八木橋雲山等也。北津輕郡長工藤行幹之ニ參與セリ。」という顔触れである。

そのほか、実体不明だが前年八三年九月の東奥立憲政党建成や、中津輕郡役所内の「館山ノ余党」や西館派戸長にてこずっている様子、「官権ニハ正義之ニ多ク居ルモ県会ニハ反対主義多キカ如シ。」という県会への民権派進出などが記述されている。筆者は県政をめぐる深刻な対立の解決をつぎのように津輕家の家政改革に求めている。

一、当県ヲ以テ陰險難県ト唱フルハコレ人民互角スルノミニアラス、旧君側ニ基^{不明}セリ。今日ヲ以テ始トスルニアラス。前段戊辰後勤王佐幕ノ相分ル、二原因シテ、有志者ニシテ相愛フル旧君側今一層改

良セシメテ真ノ正義者ヲ以テ主宰セシメスレハ此弊害地方ノ不幸ナラントイヘリ。表ニハ県治ノ涵養ヲ受クルモ内ニハ特ニ一政府アルモノ、如シ。今日ニシテ飽マテ旧封内ヲシテ陰ニ抑揚スル他藩ノ比スル所ニアラス。閣下明ニ之ヲ看破シテ其ノ幹害ヲ去ラシメンコトヲ。

次節では津軽家と事件の関係について考えてみよう。

五 事件と津軽家の対応

反民権保守派が津軽家の義塾援助を問題にしたことは右大臣岩倉具視や津軽家と縁故関係の近衛家の顧問であった元老院議員海江田信義らの家政介入をまねき、西館孤清の家令辞職と義塾への財政援助の停止という結果になる。津軽家と事件の関係を岩見文庫中の「桜庭太次馬日記」(文書番号G K二八九・六六)に見ていこう。桜庭太次馬は神盛苗とともに当時の津軽家家扶であり、西館の辞職にともない、一八八二年一月に辞職する。

本多の答申書は三月七日岩倉に提出され、四月二八日「岩倉公盛苗御呼出シ。本多・菊池等自由党云々ノ義県令ヨリ御聞取ノ廉モ有之。稍御了解ニ相成ルニ付、今後注意致スヘキ旨御談有之。」と尋問の様子も見え(2)るが、注意すべきは共同会の一部から西館の帰県要請が出ていることである。これについてはすでに『津軽承昭公伝』が「偶々自由党ニ関係アル人士ガ、孤清ヲ弘前ニ迎ヘテ為スアラントスルノ挙アル」ため、政府から「恰モ孤清ハ義塾ヲ根拠トシテ自由党ノ勢ヲ張ラントスルガ如ク」

思われ、津軽家の親戚長岡護美(承昭弟)や海江田信義らの家政干渉を招いたとのべており(三八五頁)、『津軽英鷹伝』にも同様の記述がされているが(一五六頁)、その経緯は不明であった。

日記の五月から八月にかけて、「小山内鉄弥上京。孤清退隠ノ上旧県有志輩ノ統轄トシテ金持下リノ儀孤清迄陳述數回ノ議論ニ涉リタル由」「工藤行幹参邸。孤清借用ノ趣意議論アリ。」「工藤行幹・小山内鉄弥兩人参。孤清帰県ノ義頻ニ迫ル。」「工藤行幹・吉崎棟一参邸御逢。孤清赴県ノ義願アル由」と散見でき、「西館御逢。旧県人氣慰撫ニ付帰県着手ノ義申上タル由。」「西館来。県行手順心得義塾ノ議アリ。」と西館も帰県を予定していた。一方、八月に入ってから「義塾委員田中耕一(眠叟事)着京参殿。義塾之景況并「工藤」行幹「吉崎」棟一等地周旋ノ行違ヒ等具陳セリ。」「吉崎「棟一」此順ノ挨拶ニ来ル。五所川原連義塾ト軌轢ヲ生スルヲ云々。」「田中耕一來ル。義塾五所連到底同行六ヶ敷ニ付一段落切迫ノ議アリ。」との記述が見える。

工藤行幹は北津軽郡長、小山内鉄弥は同郡相内村で牧場経営、吉崎棟一は前出史料Cの差出人の一人、田中耕一は共同会員・東奥義塾教師である。西館への帰県要請の理由ははっきりしないが、義塾と五所川原連(北津軽郡)の衝突と関係ありそうである。

ともあれ、八月二六日「西館へ集会。都谷・森・神・太次馬・木村、西館辞職之義決ス。殿様へ孤清辞表之義言上。外崎・小山内・斎藤へ相談アリ。」とあることから、西館の家令辞職は八月下旬には決定したと考えられる。

長岡護美・海江田信義らの家政干渉は一〇月から激しくなってくる。

以下、重要と思われる箇所を紹介しよう。

〔史料K〕

10・1 長岡様ヨリ御呼出ニ付太二馬参上ノ所御談。原田申出西館

云々ニ付御一門大道寺ヲ初メ大勢連署惣代人出京可致。今般ノコトハ不用意御心配ニ相成ヘクニ付大道寺ヲ御呼出之御相談可然。又義塾之義ハトメテ御家ノ景□ニ付金ヲ付ナリ共県庁ヘ付托致ス方可然旨御内家ハ惣テ他ニ関係ナキ様致度云々数刻之御談判アリ。

10・6 本日長岡様ヨリ太二馬御呼出。夜陰ナカラ参上ノ所七戸仲

行参殿建議之次第ハ西館初メ一掃御分家ヲ執權トシ大道寺ヲ補トシ云々ノ義√アルヨシ○但シ品川大輔初メ上ノ方ハ御家人進退等ニハ決テ関係不致、長岡様ヘ赤川ヨリ前日□ニ付其義ハ御遠慮無之但学校御処分一件ハ是非有之度政党論ハ華族ノ避ル所云々○七戸・川越等長岡様・赤川ノ言ヲ枉ケ申上候テハ不都合ニ付御心得云々ト御論シアリタリ。

10・9 ○近衛老公午後ヨリ入ラセラレ孤清ヲ召サレ御談アリ。

10・10 長岡様・赤川兩人御招キニ応シ参殿アリ。義塾御所置ノ義御談アリ。

10・13 菊池来。夜陰神ヘ集会。渡辺洪基アリ。

10・18 ○綿貫中警視岡ヘ依頼ノ上義塾ノ事情承度云々ノコト。午後七字北村参邸。今朝海江田近衛老公様ヘ上言并ハ書面ノ趣意右ノ由√

老公様思召ニケ条其他共等御談云々之件但午後五時海江田ヨリ北村ヲ呼出シ長岡様御相談ニテハ此件讒訴ノ為三条公ニテ御調ノ御咄モアレトモ御止岩倉公ニモ少シ御掛念ノ次第モ有之松方・佐々木等諸共海江田ヘ任セ内調ヲ依頼ノ由必竟表向ヨリ御親族近衛様・細川様手ニテ取扱然ルヘキニ決シ海江田・長岡様鬼塚トナリタル由此上ハ西館ヲ尋問実否訊問致スヘク都合ニ有之ニ付其段西館ヘ運ヒ候様海江田申聞ケタル由ヲ申述タリ。就テ否太次馬西館ヘ行模様ヲ陳シ且行クヲ賛成セリ√。

10・19 長岡様ヨリ御呼出ニテ参邸ノ所原田等願書ノ御返事ヲ申上

タルニツキ御同公ニモ御断リノ由此度ノ事件三条公ニテ御納ノコトヲ御止メノ上海江田御同公鬼塚ニテ引請取扱ノ由西館御面会被成旨西館御納ノ件ハ板垣大隈ヘ密信等ノコトニ就御内家丈ケノコトハ御関件ナシトノ事等御申聞アリ。午前三浦・菊池来ル。三浦今朝醒酬〔忠順?〕様ヨリ書面ヲ用ヒ東久世ヘ行御同公吞込宮内卿岩倉公ヘ上言ノ義承諾被致候由。……午後ヨリ岡・手塚・成田・西館等来会木村最モ早シ猶今後ノ手続キヲ相談シ座散シ菊池・西館残テ学校御処分之議色々相談アリ。

10・21 午後長岡公・海江田参邸御逢。此度之御相談数刻神・太次

馬列席御兩人ニテ学校金引上ケ西館退身御聞届ノ建議アリ御考ノ筈ニテ畢ル。

10・22 西館来ル。三浦来ル。昨夜ノ海江田行ノ談判言上ニ及ヘリ。

午後手塚・岡・成田・木村・菊池皆参会義塾御処分ノ議アリ。西館・太二・木村断然金ヲ引上クヘキヲ論ス。小山内謝罪ノ趣意三浦・岡・手塚・成田若干金ヲ投与ノ上切離シノ義ヲ立決セス畢ル。

10・24

西館・三浦・岡・手塚・菊池・成田等午後ヨリ参会。義塾処分ノ一件ヲ議ス。折合ハス。但西館・神・桜・木村等海江田建議ノ趣意ニ基キ岡・三浦・手塚・成田・菊池等昨今海江田ノ談話ヲ^(不明)□ル因テ合ハス樋口モ会。右座散シ西館・木村・樋口等居残ル西館退身ノ精神ヲ談座中同意ス。

10・25

午後西館・佐藤・三浦・成田・菊池来。但佐藤近衛様へ行、海江田御同殿へ言上シタル趣意ヲ申述アリ。学校存シテ不可ナキヲ言。三浦今日海江田へ行同断学校ノ存スヘキヲ言。座中皆欣然タリ。佐藤・三浦ヨリ其段言上シ退散シタリ。但明日海江田へ行ク約ヲセリ。

10・26

午後十二時三十分西館・三浦・岡・桜海江田へ行ク。同人口演之趣学校ハ御内家ニテハ資金引上ケ学校ハ更ニ教育一方ノ趣意ニ致シ再興ノ嘆願ヲ立ヘシ西館ハ退身ヲ許スヘシ等ノ見込ヲ述タリ。三時帰宅○西館海江田ノ頼ムヘカラサルヲ論ス。神桜香渡へ行ク。不在。銀座ニテ夜食中神ト談合、西館速ニ退身ヲ要求シ可ナルヲ悟ル。香渡へ行カスシテ帰ル。西館・木村・外崎等二面シ赤心ヲ以テ西館へ退身ヲ勸ム。許諾ス。議決ス。

10・27

午前山中へ行ク。爾来ノ談判ヨリ昨今西館へ退身ヲ咄シ夜

前ノ決議ヲ云帰ル。山中参邸御逢数刻ニシテ帰ル○雲山呈書ヲ一見セリ西館退身山中後任ノ見込ヲ建議ス。

午後佐藤来ル。今朝西館へ行キ夫ヨリ海江田へ行訴人譏誣ヲ懲シ西館正義ヲ分明セシコトヲ切論ス。且学校ノ美事ヲ語ル。海江田尤トシ同シ西館并訴人ヲ御座前ニテ双方ヲ呼出シ対決スヘキヲ云タル由旧濯愉快ノ談アリタリ積テ西館平ニ佐藤ノ議ヲ望ム座中決議ニ及ハサルニ際シ御祝初ル。……午後九時ヨリ桜へ佐藤・木村積テ西館等来会。桜対談ノ不可ヲ論ス。西館速ニ退身ノ論ヲ立何レモ同シ。

10・29

山中参殿。西館退身御聞届午後太二九条様へ御見舞二行。午後太二近衛老公様へ拝謁。孤清退身御聞届ノ御旨ヲ伺同シク御聞届。

10・30

早朝長岡ヨリ御呼出ニテ太二参ル。即決不可ノ御談アリ鬼塚一座從三位様ニモ御案事ノ由ヲ承ル。孤清退身切迫本日御聞届ナル趣ヲ陳ス○義塾へ被下金政府ノ御嫌疑掛念ノ趣意ヲ述同公両大臣辺ニ伺フノ御辞アリタリ。

本日海江田ヨリ佐藤ヲ呼ニ来ル。同人行○山中佐藤へ行。帰路同道ニテ参殿。義塾成行キノ談等アリ。御逢ノ上海江田ノ談等申上ゲタリ。

午後太二海江田へ行。西館退身御聞届ノコト義塾へハ不体裁ヲ咎メ此体ニテハ資金引上ケノ義ヲ談シ置キ未タ請ケノ出サル段ヲ申述タリ○海江田・山中・菊池へ引逢タキノ談アリ。

10・31 本日神御使ニテ西館へ行。孤清辞表赤情奪難ク余義ナク御聞届ケニナル。

11・3 天長節。午前義塾へ責問ノ書面并菊池ヨリ答弁ノ書面ヲ調

ヘタリ。午後両通ノ書面ヲ持参シ海江田へ山中同伴ニテ行ク。同人両通共尤モ同意ニテ右書面同人へ預ケ置タリ。……

○夕方ヨリ木村来ル。夜ニ入り菊池来ル。向後義塾ノ成行ヲ論スハ本多耶蘇并議員引取等ノ事。

11・5 菊池出立帰県。此度義塾へ御責問ノ義ニ付塾中ノ決議ヲ要スルナリハ本日ノ艦ニ乗ル。

11・11 山中ハ太二海江田へ行。長岡公モ御出アリ兩人ニテ三ヶ条ノ談判アリ。

一、御家人ノ外御相談相手ヲ立置コトへ人物ハ思召ニテ御究メトノコト。會計上ヲ明瞭シ傍觀者ヲシテ啄ヲ容レサル様方法ヲ立ルコト。七戸・川越ヲ召シ御意ニテ渠等^{不明}相立ヘキコト。耶蘇教ノコト。

11・16 暮方成田五十穂来ル。山中へ建議四ヶ条ノ書面草稿ノマヽ持参セリ。一ヶ条財産ヲ兩種ニ分チ一ヲ主人ニ帰ス一ヲ家ニ帰スコト會計ハ一人ニ専任スヘカラスコト近住ノ者五六名或ハ八九名ヲ以テ會計ノ得失ヲ監査并諮詢ニ備ルコト家從已下一旧県人ヲ使フコト外談数刻。

11・25 此日本多海江田へ行。午後九時迄耶蘇教ヲ難シテ本多ノ退散ヲ忠告スト。又学田地券ノ名主ヲ尋問スト云。

11・26 郷田県令参邸御逢。義塾改良スヘク三千円ハ下サルヘク政

談等ハ未タ止マス耶蘇ハ稍無キカ如シ云々申上タリ。

○成田五十穂参邸。今朝長岡公へ行キ津田純一約定済迄留置キ度本多退校事件落着ノ後ニ致度云々申上タル由。御答津田進退ノ義海江田へ相談スヘシ本多ノ義ハ退校然ルヘシト云。

11・28 外崎木村へ行ノ所三浦・樋口・飯田等ト築地寿美屋へ会シ、飯田県令ノ談ヲ語ルノ由義塾ノ地券他人ノ貸預ヲ咎義塾會計監査人ヲ立ルコト。上ノ方ニテハ御分家・平八郎・大導寺・二老・西館等惣会議ニテ已後ノ体裁ヲ立テ可然ヤノ義

11・29 ○飯田・三浦・木村・本多等集会。義塾へ被下金ノ義ニ付異論ノ由。

○郷田へ行。不在。佐藤へ行面会。帰路西館へ立寄ルハ海江田干涉ノ件本多廻退ノ件等。

事件の波紋は予想外に広がった。太政大臣三条実美をはじめ、大蔵卿松方正義・元老院議官渡辺洪基・板垣退助・大隈重信らも事件関連者として名が出てくる。一月頃からは家政改革・義塾改革がおこってくる。

一二月三日には長岡・海江田・郷田の三者協議が「已来義塾ヲハ県庁へ突出スヘシ。左スレハ本多ヲ除キ菊池ヲ始メ役員ヲ改正シ組織ヲ改メ傍ラ原田等ノ者ヲ入レ相持ニ致スヘシ云々」に結論し、家令山中一郎・家扶佐藤清衛・家政相談者杉山龍江・同飯田巽らが「衆論ノ末遂ニ御断リ然ルヘキニ決シタ」。しかし、同七日、海江田は「義塾ニテ地券旧ニ復シ本多・菊池退校学田ヲ以テ県庁ノ指揮ヲ受ケヘキノ理ヲ御内家ヨリ塾へ御論シ然ルヘキノ義」を主張して譲らない。結局、同九日「義塾ヲ県

庁へ可引渡旨御説諭ノ為御家扶ヲ差出スヘキ旨ニ決議」し、桜庭が津輕家の使者として義塾に赴くことになった。桜庭は同一日郷田県令に会い、「義塾へ明十六年ヨリ出金差止メノ義口上ニテ事情陳述今般県庁へ可引渡旨御説諭ノ為使参ヲ含ミ赴県ノ段相達県庁ニ於テ猶示談可致旨」を伝えている。こうした義塾弾圧の報に急遽上京し弁明につとめたのが菊池九郎である。

12・20 菊池京着。神ニテ面会。同人義塾ノ改良ヲ尽力シ誓書ヲ持

参シハ太二ノ説諭ノ使命ヲ奉シタルヲ難シ語氣猛勵誠意言
外ニ溢ル。ハ太二ノ菊池同伴山中へ行。同人議論前ニ同シ。

山中討論菊池屈セス。

12・22 菊池、海江田へ行ク。大ニ議論シ海江田挫折。ハ太二ノ

県行ヲ延シコトヲ談シタルヤ。

菊池の主張にさすがの海江田も屈した。『津輕承昭公伝』は「十一月に至り、郷田青森県令より義塾は尚政党に関係し、糾査すべき事あるを以て、暫く一万円の交付を止むべしとの照会ありしが、監督菊池九郎の弁疏ありて其事情了解し、県令其異義を撤したるを以て、十二月に至り其金額交付を了せり。」とのべている（三八六―七頁）。

桜庭はこの間の家政混乱の責任をとって二月二日家扶を辞職する。

「桜庭太次馬日記」の記述もそこまでである。

六 むすび——弘前事件の意味

以上、弘前事件の発端から一応の終結までを見てきた。検討した史料

が弘前市立弘前図書館所蔵の史料中心だったので、今後、県内各地および県外に所在する史料の調査研究の必要があるが、事件の骨格として、つぎのようなことがいえると思う。

第一に登場人物は、民権派士族・反民権派士族・津輕家・明治政府の四者であり、民権派士族は共同会は決して一枚岩ではなかった。

第二に第三者として、山田県令の共同会任用をきっかけに、穩健な「改進主義」路線の定着をはかろうとする士族層がいた。

第三に山田県令急死後の反民権郷田県令体制になっても、共同会の優勢は続き、反民権派士族・明治政府にとって共同会は東奥義塾処分が焦眉の課題となる。

第四に共同会は東奥義塾処分は津輕家の家政改革^③の形をとり、民権派士族・津輕家と反民権派士族・明治政府のせめぎあいの結果、東奥義塾は存続したものの、その財政規模は縮小した。

結論的に言えば、弘前事件の本質は明治政府による民権運動弾圧にほかならず、基本的対抗関係は明治政府対民権派士族（共同会・東奥義塾）である。弾圧が直接的ではなく、反民権派士族の介在や旧藩主津輕家の家政改革を通じた間接的なものであったことが、これまで弘前事件を単なる士族の実権争いやミクロな抗争に矮小化してきたといえよう。今後、この視点に立った青森県民権運動の再検討・再構成を研究課題としたい。と同時に、事件が旧藩主津輕家にあたえた影響も重要である。従来言われてきた民権派士族と旧藩主との「封建的つながり」も、民権派の弱点であったと同時に、旧藩主にとつての弱点でもあった。それゆえ、「政党論ハ華族ノ避ル所云々」と華族への民権思想の浸透が憂慮され、両者

の結節点たる東奥義塾の改革をめぐって、明治政府は旧藩主津軽家の家政に直接介入し(第五章)、反民権の動きは端緒的とはいえ家政改革をよびおこしたのである(第四章)。

幕末維新期、奥羽越列藩同盟から脱退し、箱館戦争の官軍側前線基地となることで明治維新の△勝者▽に組しえた旧藩主津軽家も、弘前事件において明治政府から旧藩士族層との「封建的つながり」を否定され、新政府との△近代的つながり▽を強要された。この意味で、弘前事件は津軽家にとって△敗者▽としての明治維新であつたのである。

註

(1) 「笹森儀助雜綴」第一四冊中の住所録に「青森市浦町斎藤元三郎」と見えるが、この人物についても不明である。

(2) 「桜庭太次馬日記」の一八八〇年五月三十一日の項にすでに「右大臣付書記山本復一岩倉殿御使口上ノ表義塾ニテ耶蘇教主張之信偽御尋ニ付御逢之上事実御答アリ。委細ノ顛末太次馬御答致セリ。」とあり、早期から岩倉が東奥義塾の動向に注意していたことがわかる。

(3) 『陸羯南全集』第一〇巻に津軽家の家政改革に関する笹森儀助宛陸羯南書簡が載っている。一九〇五年七月十三日付とされるこの書簡は「津軽家ノ改正ハ一点ノ私心アルベカラス。此辺能ク御注意ヲ願フ。」と書き出して、「何時(モ)御一家改正ハ党派ノ争ノ如ク又ハ山師か金儲ノ手段トシテ行ハレ来リシ故、今回ハ此ノ弊ナキヤウ致度候。」と家政改革の複雑さを指摘している。ところで、編者が内容・消印等より推定した一九〇五年(明治三十八年)という書簡年次は

疑問である。というのも、羯南は家令人事について「小生ハ矢張り西館孤清ヲ再任セシ」めたいとのべているが、孤清は一八九二年に死去しているからである。羯南とあるうものが孤清ほどの人物の死を一三年間も知らぬ筈がない。筆者はつぎのような点から、この書簡年次を一八九九年と推定する。①一八九九年二月、家令八木橋雲山はじめ家扶三人が家政改革を求めて総辞職したことで同年一月頃まで家政機関はストップしており(『津軽承昭公伝』三九七―九頁)、家政改革の必要が生じている。②羯南が孤清推薦の理由の一つに挙げる「六七年蟄居シテ貧ヲ守ル事ハ、其ノ精神ヲ見ルニ余リアリ。決シテ不忠ノ人ナラサル事。」は一八八二年の家令辞職と符号する。③また別の理由である「此人ヲ挙クレハ津軽家ノ光ヲ増シ華族中ニ恥辱ヲ受ケサル事。」とは、一八八七年二月邸内でおこった家従殺害事件が世間を騒がせたことを指している。

(上越教育大学学校教育学部講師)

〔付記〕本稿作成にあたり、弘前市立弘前図書館ならびに杉山丕氏にお世話になりました。記して感謝いたします。